

## ヤマノイモ省力栽培のための小丸種芋生産

小丸種芋を用いたヤマノイモ栽培では機械などによる定植が可能となり、作業の大幅な省力化につながる。そこで、10 a 当たりの栽培に必要な約4千個の小丸種芋の効率的な増殖法を紹介する。

### 内 容

「丹波ヤマノイモ」の慣行栽培では翌年の栽培用に10a当たり約200kgの種芋が必要となる。種芋は定植前に頂芽を切り落とし、40～50gに切り分け、その後、表皮を下方向にして手作業で定植する。そのため、多くの作業時間がかかり、身体への負担も大きい。一方、小丸種芋を用いた栽培では、ピンポン玉大の種芋を直接定植する。種芋を切り分けず、さらに定植の方向性もないため、機械定植が可能となり、省力栽培につながる。

小丸種芋で10 a 栽培するためには、約4千個が必要となる。方法として約20kgのヤマノイモを増殖用として準備する。頂芽を切り落とし、厚さ1 cm程度の輪切りにして、表皮を一片1 cm角残したクサビ状に細断する(約5 g)(写真1)。それを4月下旬から5月中旬に植栽間隔10cm×10cmで定植する(約1 aが必要)。その後、土壌の乾燥

に注意しながら管理すると、約1か月で萌芽<sup>ほう</sup>が始まる。この時期は雑草管理が重要である。収穫は慣行栽培と同じ10月下旬から11月中旬である。収穫した小丸種芋は大きさ別に選別し、乾燥しないよう冷暗所などで貯蔵する。翌春、半自動野菜移植機やハンドプランターで定植する(写真2)。以後の栽培管理は慣行栽培と変わらず、秋には収量、品質も同等のヤマノイモが収穫できる。小丸種芋を利用したヤマノイモ栽培では、翌年用に残す種芋が慣行栽培の約1割に減らせる。さらに半自動移植機で定植すると約4分の1の作業時間になる。

### 今後の方針

産地におけるヤマノイモ面積拡大のため、普及センターと連携して、本技術の普及を進める。

小谷 良実(北部 農業・加工流通)  
(問い合わせ先 電話:079-674-1230)



写真1 くさび状に細断



写真2 定植前の小丸種芋とハンドプランター